

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月31日現在

機関番号：37604
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21510298
 研究課題名（和文） メディアに描かれたスポーツにおけるジェンダー・セクシュアリティおよびその解釈
 研究課題名（英文） Gender and Sexuality in Sport Represented in Mass Media, and Its Readers' Interpretations
 研究代表者
 藤田 由美子（FUJITA Yumiko）
 九州保健福祉大学・社会福祉学部・准教授
 研究者番号：10284134

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は次の通りである。第一に、女性がスポーツの主体として描かれるスポーツマンガの分析より、他者としての女性、性的対象としての女性、指導者-選手関係におけるジェンダーの非対称性、という描写が明らかになった。第二に、女性が登場するマンガ作品の読み取りインタビューより、回答者のスポーツやジェンダーに関する経験によって、作品や登場人物におけるジェンダー表象の解釈が異なることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The findings of this research are as follows: Firstly, analysis of sports comics in which women are described as players or managers revealed several representations, such as women as others, women as sexual objects, and gender asymmetry within manager-player relationships. Secondly, interview on readings and interpretation of comic episodes in which women players or managers are involved revealed that the interviewees' experiences on sport and gender influenced their interpretations of the gender images in the comic episodes and the women characters.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：ジェンダー

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：メディア、スポーツ、ジェンダー、セクシュアリティ、解釈

1. 研究開始当初の背景

(1) 先行研究の動向

a. メディアとジェンダー

1960年代以降、マス・メディアに描かれた性役割/ジェンダーの内容分析が数多く行われてきた。それらの多くは、女性の登場が

少ないことや補助的役割に従事していること、「男は仕事、女は家庭」など性別役割分業の描写がみられることを明らかにしてきた。メディアの質的分析については、さらなる蓄積が必要であると考えられる。その際、ジェンダーとセクシュアリティの交差も踏まえた視点が必要であると考えられる。

メディアの効果については、従来、学習理論にもとづく直接的効果の検討が行われてきた。その後、長期的・重層的効果を検討する必要性が指摘され、回想記分析の試みがなされた(井上 1990)。また、フェミニストポスト構造主義にもとづく、子どもによるフェミニスト物語の解釈に関する論考が行われた(Davies 1989)。今後は、読み手によるメディアの解釈内容の質的分析、子ども向けメディアをめぐる大人の解釈の構造について、検討を行う必要があると考えられる。

b. スポーツとジェンダー

近年、スポーツとジェンダーの問題が注目され、歴史学、社会学などの領域で分析・考察が行われている。たとえば、スポーツの歴史における女性(渡部 2005, 谷口 2007)、スポーツをする女性へのまなざし(高橋ほか 2005)について、さまざまなメディアおよび史料の分析が行われてきた。また、スポーツをめぐる人々の解釈におけるジェンダーの問題については、意識調査や観察調査も行われている(羽田野 2000 など)。

一方、メディア情報におけるジェンダー・バイアスの問題と子どもや大人のスポーツ観におけるジェンダー・バイアスがどのように関連するのかについては、十分な論考が行われているとはいえない。たとえば、スポーツをテーマにしたメディア内容について、読み手はどのように解釈するかについて、明らかにすることは必要である。

(2) これまでの研究について

申請者は、平成 12 年度～平成 13 年度科学研究費補助金基盤研究(C)において、幼児期における「ジェンダーへの社会化」を明らかにするため、子ども向けテレビ番組および絵本の内容分析、幼児の観察を行い、彼らがメディアのジェンダー情報を利用することを明らかにした(藤田 2002)。平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金若手研究(B)では、子どもの身体のジェンダー化を検討するため、子どもの観察調査および子どもへのインタビューを実施した。子どもたちは、自らのジェンダーおよび社会におけるジェンダーの枠組みを参照しながら、メディア内容やスポーツを解釈していた(藤田 2007)。そこで、これらの研究をさらに発展させ、スポーツを描いたメディアの解釈を通して、社会のジェンダー構造を明らかにしたい。

2. 研究の目的

本研究は、メディアに描かれたスポーツにあらわれたジェンダーとセクシュアリティを内容分析で明らかにし、それをめぐる読み手の解釈を明らかにすることを通して、社会におけるジェンダー秩序・ジェンダー構造な

どを検討することを目的とする。なお、本研究で分析・考察の対象とするメディアは、テレビなど映像メディアおよびマンガ図書である。

本研究の学術的特色は三点ある。第一に、メディアに描かれたスポーツを通してあらわれるジェンダー・セクシュアリティについて、メディア内容と読み手の解釈の両面から明らかにしようとすることである。第二に、読み手に対するメディアの効果を見るという視点ではなく、むしろ解釈の構造より、メディアと読み手の関係をとらえようとすることである。第三に、内容分析において、役割分析ばかりではなく、言語・表象にあらわれたジェンダー・セクシュアリティを、質的分析を活用して明らかにしようとすることである。

本研究の意義は、下記の三点である。第一に、スポーツをめぐるジェンダー・ディスコースを、メディア表象と人間による解釈の両面から明らかにすることができる。第二に、ジェンダー秩序が、スポーツに関するメディアメッセージによって媒介されるさまを明らかにすることができる。第三に、読み手とメディアの関係、メディアとジェンダー・セクシュアリティ、スポーツとジェンダー・セクシュアリティをめぐる諸議論への実証的貢献ができる。

われわれの生活世界は、ジェンダー秩序によって統べられており、メディアに描かれたスポーツに表象されるジェンダー・セクシュアリティは、われわれの世界におけるジェンダー実践の結果であり、またその実践を喚起するものであると考えられる。本研究では、メディアに描かれたジェンダー・セクシュアリティの分析、および読み手の解釈構造の分析を通して、その一端を明らかにしたい。

3. 研究の方法

(1) 先行研究・関連研究の整理

下記の先行研究を中心に、資料収集を行い、研究動向を整理した：①メディアに描かれたジェンダー・セクシュアリティに関する研究、②メディアに描かれたスポーツに関する研究、③メディア表象の分析・図像分析研究、④スポーツとジェンダーに関する研究。

先行研究の整理により、メディアとスポーツに関するジェンダー研究の見取り図を提示した。あわせて、内容分析およびインタビューの研究動向の整理を通して、本研究での研究方法論を検討した。

(2) スポーツが描かれたメディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの内容分析

本研究では、スポーツが描かれたマンガを対象に、ジェンダー・セクシュアリティに関

する内容分析を行った。分析にあたっては、登場人物の関係性、コミュニケーションばかりではなく、表象にも注目した。

本研究では、スポーツマンガを分析の対象とした。スポーツマンガは、1960年代以降多くの作品が発表され、大衆文化として普及したものであり、スポーツに関する表象の分析に適していると考えられる。

スポーツマンガに注目したのは、マンガというメディアの特性にもよる。マンガは、登場人物の描写において、言語情報だけでなく視覚情報が多いため内容分析に値する。また、マンガにおける誇張された描写、あるいは現実社会とはかけ離れた描写は、読者が共有する価値意識を映す鏡であり、また読者に何らかのジェンダー・セクシュアリティ観を喚起する作用を有すると考えられる。

本研究では、主に野球とバレーボールに注目した。野球は競技人口のほとんどが男性であることから、女性の存在は、図らずも読み手のジェンダー観念をあぶり出すだろう。一方、バレーボールは中学校体育で取り扱われる競技であり、また1964年開催の東京オリンピックで女子代表チームが優勝した後、現在に至るまでマス・メディアに注目されている人気競技であるからである。

本研究では、収集・閲覧した野球マンガ29作品中、女性が野球選手あるいは指導者である17作品を分析・考察の対象とした。このうち4作品には、女性競技者・女性指導者が描かれている。バレーボールマンガについては、6作品を対象に、師弟関係およびジェンダー関係の分析を行った。なお、本研究では、対象を少年マンガ・少女マンガに限定せず、青年向けマンガ、成人向けマンガも加えた。

本研究では、次の二つの質的内容分析を行った。第一に、女性競技者・女性指導者の表象の分析、第二に、ジェンダー・セクシュアリティの関係性の分析を行った。

(3) スポーツマンガの解釈およびメディアとスポーツ経験に関するインタビュー

学生11名、成人2名を対象に、スポーツマンガの解釈およびメディアとスポーツ経験に関する、自由インタビューを実施した。

解釈対象のマンガ作品は、野球およびバレーボールマンガのうち、「女性指導者」が登場する作品、部分的にジェンダー秩序の攪乱が示唆される描写のあるエピソードを選んだ。抽出されたエピソードは、次の4点である。田中モトユキ『最強！都立あおい坂高校野球部』（小学館、2005～2010、全26巻）第1話（第1巻）、ひぐちアサ『おおきく振りかぶって』（講談社、2003～、分析時13巻まで刊行）第1話（第1巻）、日本橋ヨヲコ『少女ファイト』（講談社、2006～、同7巻まで）第10話、第11話（いずれも第2巻）。

調査者には、調査協力者に、あらかじめ文書および口頭で、調査者がジェンダーとスポーツに関する研究を行っていること、インタビューではスポーツマンガの解釈とメディアとスポーツ経験について語ってもらうことを事前に説明した上で、マンガ作品を、学生には各1エピソード、成人には2エピソードを事前に配付した。

インタビューにあたっては、質問内容および構成を必ずしも固定しなかった。インタビュー時間は約60分から180分であり、学生回答者は授業の空き時間に回答したため90分以内におさまった。

インタビューの回答については、回答者にあらかじめ承諾を得た上でデジタル録音を行った。総録音時間は約18時間4分、ひとりあたり平均録音時間は83.4分であった。デジタル録音データは、専門業者によって逐語録化された。この逐語録を、分析データとした。

なお、インタビューで解釈対象とするマンガ作品が青年・成人向けマンガであったことから、子どもを対象としたインタビューは、本研究では行わなかった。

4. 研究成果

(1) メディアに描かれたスポーツにおけるジェンダー・セクシュアリティに関する研究の動向

国内刊行の図書、博士論文、雑誌記事、科研報告書等については、NDL-OPACを用い、「メディア」「スポーツ」「ジェンダー」のキーワードで検索を行い、入手可能なものについては購入し、不可能なものについては国会図書館で閲覧した。外国で発行されている図書についても、media, sport, genderのキーワードで同様に検索し、可能な限り入手した。

先行研究の検討を通して、次の知見を得た。
①近年、スポーツとジェンダー研究は、メディア分析（言説分析）、ライフヒストリー研究、などが行われており、ジェンダー秩序の構築が注目されつつある。

②メディアに描かれたジェンダーの内容分析にあたっては、視覚社会学の知見が応用可能である。

(2) スポーツマンガの内容分析

1) 野球マンガにおける「他者」としての女性指導者

本項では、『おおきく振りかぶって』の百枝まりあと『最強！都立あおい坂高校野球部』の菅原鈴緒に注目して、彼女たちの描写にあらわれた女性表象について分析する。

① 女性指導者の拒絶への抵抗

高校野球部の女性監督が登場する作品においては、物語の冒頭、女性が指導者であることに対する抵抗が示されることがある。こ

れらに対し、女性監督たちは、自らの有能さや力を彼らに誇示することで抵抗する。

百枝まりあは、新規発足した硬式野球部の監督である。彼女は、バイト代をすべて野球部のために使うなどかなり野球熱心である。物語の進行に伴い、彼女が西浦在校中軟式野球部のマネージャーであったこと、彼女が中心となって硬式野球部に変えようとした結果野球部の先輩たちとのつながりがなくなったこと、などが明らかにされていく。

第1巻第1話、春の入学式の日、硬式野球部の入部希望者が集まる場面で、新入生で入部希望者のひとり花井は、監督が女であることに抵抗を感じ、「女が監督だから」と入部をやめようとする。百枝は、バットでボールを「リフティング」してみせ、垂直に高くキャッチャーへのノックを打ち上げ、ノック技術の高さを誇示する（『おおきく振りかぶって』第1巻、pp.8-9）。さらに、百枝は、その場にあった甘夏を両手に持って握りつぶし、絞り出されたジュースをコップに受け、花井に飲ませる。「女って・・・女って・・・」と震えながらそれを飲む花井の描写は、百枝の「女性性」と「ノック技術」「腕力」のギャップに対する彼の混乱を表している。

菅原鈴緒は、大学まで硬式野球部に在籍し、大学のリーグ戦で「マドンナ」として注目された。自らかなわなかった甲子園出場を実現しようと教師になり、都立あおい坂高校（「あお高」）で野球部の監督となった。しかし、進学に力を入れる学校では教職員の理解を得られず、厳しい練習を課したために部員のほとんどに逃げられてしまう。そこへ、菅原のいここにあたる主人公の北大路輝太郎をはじめ、少年野球チーム「ボマーズ」の教え子6人が、彼女を助けるために「あお高」に入学する。野球部に残った3名と合わせ9名だけで再出発した野球部は、菅原の指導によって力をつける。夏の甲子園大会予選で、菅原は、巧みな采配と選手掌握術により、彼女を「アイドル」としてしか見ていなかった相手チームの指導者や選手たちを見返す。

百枝と菅原の描写から、二点を指摘できる。第一に、彼女たちは、野球部においては「他者」である。第二に、彼女たちは、自身の力量によって自分の存在を認めさせることではじめて、部への「仲間入り」を許される。

②「女性性」への焦点化と誇張

一方、女性監督たちは、「女」であることにより、周囲の男性たちからの「好奇」のまなざしを受ける存在でもあった。肉体の一部を強調する描画、男性登場人物による発言などによって、彼女たちは「女性性」を表現する存在＝「見られる客体」として構築される。

たとえば、菅原鈴緒は、しばしば、対戦校の選手や指導者など男性たちによって、容姿に言及されていた。

「あお高」の試合を視察する強豪校の選手たちによる会話の場面の1ページの最初のコマ（『最強！都立あおい坂高校野球部』第2巻、p.116）には、菅原が腕をひろげて立っている姿が大きく描かれている。それは選手たちの視線からの菅原の姿であり、彼女が美貌と豊胸に注目されていることを示唆する。また、彼女の姿を描いたコマに書かれている強豪校の選手たちのセリフ（セリフと同時に顔は描かれていない）には、少年野球チームの名選手たちが都立高校に集まったのは彼女への性的興味からではないかという揶揄と、彼女に「しごかれない」「（甲子園に）何度でも連れてってあげたい」と、性行為を思わせるような表現がみられる。

また、百枝まりあは、部員たちから厳しい指導者として畏敬されている一方で、彼女の容姿はしばしば注目の的となる。たとえば、彼女を取材する女性新聞記者は、百枝を見た時、その美貌と豊胸が目に入る。また、夏の大会初戦における強豪校・桐青高校との試合で、相手捕手兼主将の河合は、試合中に、部結成間もないチームをうまくまとめている西浦高校監督・百枝の力量に感心しつつ、ベンチにいる彼女の動きを確認しようとする。その時、彼は、ベンチで腕組みをして立っている百枝の豊胸が目に入り、一瞬目をそらす（第6巻、p.21）。

百枝が「女性」であるという特殊性は、部員たちよりは外部の者によって言及される。たとえば、学校の応援団長を務める浜田は、クラスマッチの休憩時間に、勝ち進む西浦高野球部は取材の対象となるであろうこと、マスコミはまず監督の経歴やバストなどに興味本位で注目するのではないかと同じクラスの3人の部員に語ろうとする。

菅原と百枝については、身体が強調されることにより彼女たちの「女性性」が強調されていた。先述のように、彼女たちは、監督としての技量を示すことによって、男性的集団である野球部への参入が認められている。その一方で、彼女たちは、身体においては、常に「女性」として見られる客体であり続ける。そのまなざしは、とりわけ当人および当人の所属する集団の外部にいる者のものである。この描写は、作品内部の「部外者」とどまらず、作品の「外部」の存在、すなわち、潜在的な読者による彼女たちへの予想されるまなざしをも描いている、とも解釈できよう。

2) バレーボールマンガにみるジェンダー

①師弟関係の変遷

女子バレーボールのマンガにおいて、主要登場人物の指導者は男性が多い。

1960年代末に発表された作品において、師弟関係は、強い指導力を持った指導者（コーチ、のちに監督）に選手がついていく構図であった。指導者は、時として体罰も伴うほど

の強い指導を行う。一方、選手たちは、指導者を信じ、彼または彼女の厳しい指導にも耐える。たとえば、神保史郎作、望月あきら画『サインはV!』（講談社、1968-1970、全8巻）では、主人公の朝丘ユミは、自分をバレーボールに導いてくれた監督・牧を信じ、ついて行く。また、ほぼ同じ時期に発表された浦野千賀子『アタック No. 1』（集英社、1968-1970、ホーム社漫画文庫全7巻）では、鮎原こずえは、富士見学園中学校から高等学校でのバレー部で、指導者の厳しい練習に耐え、小柄ながらアタックの名手になる。この作品では、本郷をはじめ指導者のほとんどが男性である。途中、バレー部顧問の国語教師・清水晴子が指導者となるが、彼女は大学バレーの選手でありかつ「校長の娘」である。

1990年代初頭に発表された作品にも、強い指導力を持つ男性指導者と女子選手という構図は維持されている。藤田和子『真コール!』（小学館、1991-1992、全9巻）では、バレーボールを始めたばかりの藤咲真（まこと）のために、クラブチーム JVC の監督・万紀は特別なメニューを組む。また、佐々木潤子『BAN BON!』（集英社、1992-1994、全9巻）の第二部（5巻〜）で、和久井勇（ゆう）は男子校の中学校に「男」として入学し、監督のはるきに「男子選手」として鍛えられる。

この指導者-選手関係に、変容がみられる。1990年代後半に発表されたヒラマツ・ミノル『ヨリが跳ぶ』（講談社、1995-1999、全20巻）において、指導者は「見守る」存在として描かれている。主人公の大久保ヨリは、高校のバレー部顧問が手を焼くほどに試合に夢中になってしまうとチームプレーができなくなる選手だった。顧問は大学の後輩でありオグリ製菓の監督・高崎にヨリを紹介する。高崎は、ただ体が大きく食べることが好きなヨリに驚く。しかし、高崎は、次第に、大久保の「器」に気づき、彼女の成長を見守る。

2000年代に発表された『少女ファイト』に登場する女性指導者、黒曜谷高校女子バレー部監督・陣内笛子の描写は特徴的である。彼女は、喪服として黒紋付を着用し、杖をついて歩く。彼女は、選手に「文武両道」を求め、テスト成績が「赤点」ならレギュラー剥奪という厳しい条件を課す一方で、選手との距離を置いて見守る。彼女の服装や態度の背景に、彼女の高校時代、春高決勝前日にチームメイトの大石真理（練の姉）が目の前で交通事故に遭い死亡したことについて、自分が救えなかったという後悔がうかがえる。

②恋愛描写の維持および変容

とりわけ少女マンガにおいて、「恋愛」は重要なモチーフとなっている。たとえば、『アタック NO. 1』の鮎原は、遠い親戚で初恋の人・ノ瀬努の励ましを受けながらバレーに打ち込む。努が電車にはねられ死亡し、深い

喪失感を感じた鮎原は、努の母親がくれた彼の日記を読んで自分への思いを知る。彼女は、努の双子の兄・竜二にその面影を見るが、心の中に生き続ける努を大切にしようと思う。

また、『BAN BON!』第一部では、中学校の強豪バレー部のマネージャーをしていた主人公・水月菜里子が転校先の中学校でセッターとして成長する。水月の成長の陰には、恋人の同級生・東間の励ましがある。

『真コール!』では、主人公・藤咲が初恋の人・渡辺のこたばをきっかけに初体験のバレーボールを始める。学校の部活動では才能をもてあましていた藤咲は、誘われてクラブチームに入る。その後も藤咲は、次々訪れる試練も彼の助言によって乗り越える。

『少女ファイト』においても、恋愛は、物語の重要な伏線となっている。大石練（ねり）をめぐる人間関係の背景にある恋愛は、必ずしもロマンティックではない。

小学6年の時、大石と同級生の式島未散（みちる）が居眠り中の大石にキスしようとしたところを大石の親友の唯（ゆい）隆子に盗撮され、それが同級生にばらまかれたために大石はチームメイトから仲間はずれにされた。このことにより彼女は人間不信になり、自分の能力に対する自信を失う。未散も写真をネタに隆子に交際を迫られ性関係を持ってしまったことで、ふつうの恋愛ができないという不安に苛まれる。未散は、隆子との関係を解消するために、中学校時代のクラスメイトでもある同級生の小田切学（まなぶ）に「(形だけでも)つきあう」ことを提案し、小田切は事情を知りつつそれを受け入れる。

(3) スポーツマンガの解釈の分析

1) 回答者のスポーツ経験とスポーツマンガ

回答者のほとんどが、大学入学までに、地域のスポーツクラブや部活動などでスポーツを経験していた。スポーツ経験を有する回答者の、過去のスポーツマンガへの接触のあり方は、さまざまであった。回答者の学校時代の人気競技を扱ったマンガ（例：野球マンガ、1960-1970年代のバレーボールマンガ、1980年代以降のサッカーマンガ）への接触は、回答者が経験した競技に関係なく多くみられた。中には、自分がしている競技種目の参考にしたと回答する者もいた。

2) スポーツマンガの読み取りの特徴

本インタビューにおいて、回答者と調査者は共同してスポーツマンガの解釈作業を行っていた。回答者と調査者は、互いに言語的・非言語的コミュニケーションを通して、相互の解釈作業に影響を及ぼしていた。スポーツマンガの読み取りの、全般的な特徴は下記の通りである。

第一に、回答者と調査者は、自らのスポーツ経験を踏まえ、当該エピソードの解釈を試

みていた。自分が経験した競技と同じであるかどうかにかかわらず、自らのスポーツ経験での経験と重ね合わせて、当該作品で描かれる出来事を解釈していた。

第二に、回答者と調査者は、画像を手がかりに、登場人物の内面を詳細に解釈しようとしていた。たとえば、『おおきく振りかぶって』冒頭で三橋が自宅庭で「9分割のストライクゾーン」のプレートめがけて投げ込む数コマの描写の意味、『少女ファイト』で小田切が髪を切ったことの意味、など、画像データから登場人物の心理が読み取られていた。

第三に、回答者と調査者は、主人公など主要登場人物の「成長物語」にしたがって解釈を試みていた。登場人物の今後の成長への言及が多く回答者によってなされた。

3) スポーツマンガにおける攪乱への注目

本インタビューでは、スポーツマンガの中でも、従来のスポーツマンガ像やジェンダー秩序を攪乱する可能性を持つエピソードを提示した。その結果は次の通りである。

各作品については、指導者の異質性に言及されていた。『最強！都立あおい坂高校野球部』については、監督の菅原鈴緒がかつての教え子に「守られる」という解釈がみられた。『少女ファイト』については、監督の陣内が部員と距離を置くことへの言及がみられた。『おおきく振りかぶって』については、技術を見せる女性監督と理論を示す男性顧問教師のコンビへの注目がみられた。

とりわけ野球マンガにおいて、女性指導者の「他者」性への言及がみられた。『おおきく振りかぶって』の百枝まりあについては新入部員による拒否、「正確なキャッチャーフライ」「甘夏つぶし」に言及され、『最強！都立あおい坂高校野球部』の菅原鈴緒については大学野球のアイドルという経歴や練習試合相手校の監督の好奇のまなざしへの言及がみられた。また、『最強！都立あおい坂高校野球部』については、女性身体を誇張して描写することへの言及もみられた。回答者の中には、描写の背景にあるジェンダー秩序の存在を指摘する者もいた。

現実世界におけるバレーボールや野球の指導者における女性の存在について、バレーボールについては競技人口の割に女性指導者が少ないと考えられていた。一方、野球については、野球人口が少ないことを背景に、現時点で女性指導者はほとんどありえないだろう、と捉えられる傾向にあった。

(4) 結論

以上の内容分析およびインタビュー結果を踏まえての考察を通して、次の結論を得た。

第一に、スポーツマンガの分析を通して、スポーツを取り扱うメディアの描写において、ジェンダー秩序の攪乱がみられる。その

一方で、性的客体としての女性イメージの流布は今なお持続していると考えられる。それは、現代社会におけるスポーツとジェンダー・セクシュアリティの密接な関連を示していると言えよう。

第二に、スポーツマンガ作品の読み手は、彼ら・彼女らの作品の解釈は、読み手本人のジェンダー観やスポーツ経験、調査者との相互作用を通して、作品の解釈を紡ぎ出している。その解釈は、物語の枠組みから登場人物の心理などの詳細な描写に至るまで、また現実レベルと虚構レベルの双方への言及がされるなど、重層的である。ジェンダーを攪乱する描写への感受性は、読み手のスポーツ経験やジェンダーへの理解などによって多様である可能性もある。

今後は、インタビューの詳細な分析によって、読み手と調査者の相互作用を通しての協同的なメディアの読みについて、また、ジェンダー・セクシュアリティ概念の共同構築について明らかにしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 藤田由美子, スポーツマンガにおけるジェンダー秩序に関する考察: 野球マンガにおける女性監督の分析より, 九州保健福祉大学研究紀要第12号, 2011年3月25日, pp. 69-78.
- ② 藤田由美子, スポーツマンガに描かれたジェンダー文化: 女子バレーボールを題材に, 九州保健福祉大学研究紀要第13号, 2012年3月25日, pp. 47-56.

[学会発表] (計3件)

- ① 藤田由美子, スポーツから距離を置く私: もうひとつの「スポーツとジェンダーの教育社会学」の試み, 日本教育社会学会第61回大会, 早稲田大学早稲田キャンパス, 2009年9月12日 (発表要旨集録 pp. 31-32).
- ② 藤田由美子, スポーツマンガとジェンダー: 野球マンガの中の女たち, 日本子ども社会学会第17回大会, 京都女子大学, 2010年7月3日 (発表要旨集録 pp. 70-71).
- ③ 藤田由美子, スポーツマンガとジェンダー(2): バレーボールマンガの分析, 日本子ども社会学会第18回大会, 明星大学, 2011年7月2日 (発表要旨集録 pp. 60-61).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 由美子 (FUJITA YUMIKO)

九州保健福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号: 10284134